語形成における名詞範疇条件*

高　橋　勝　忠

0. はじめに

生成形態論の研究が Siegel (1974) や Aronoff (1976) により始められたとすると、それ以来、20年近く生成形態論は発展してきたことになるが、最近の動向として、生成形態論を統語論で発掘された諸原理との関連で分析する試みがなされている。[1] 本稿においても統語論で仮定されている投射の原理 (Projection Principle)[2] が語形成規則の過程において応用されることを見る。特に、本稿で試みる名詞範疇条件 (Noun Category Condition) は、θ 理論との関連で捉えられる可能性を示唆する。まず、第一節では、Siegel (1974)、Allen (1978) により提案された順序付け仮説の概略を示し、その問題点を 1) 定義上の問題、2) 順序付けパラドックスの問題、3) 過剰生成の問題として挙げる。これらの問題に対処するために第二節では、名詞範疇条件を提案し、具体的な解決法を提示する。第三節では、語形成における名詞範疇条件の妥当性として、ゼロ派生・切り取り規則・下位範疇化の簡略化など、形態論に見られる諸現象や形態論で必要な諸条件を名詞範疇条件でどのように説明できるのかを試みる。

---

* 本稿は、第6回日本英語学会全国大会 (1988年11月12日、青山学院大学) の席上で口頭発表したものに加筆修正を行い、発展させたものである。

1 Kiparsky (1983)、Fabb (1984)、Sproat (1985) を参照。

2 すべての統語レベル (D構造、S構造、LF) の表示は語彙部門からの投射であり、各語彙項目の語彙的特徴 (下位範疇化および主題役割の情報) を保持していなければならない。

1. 順序付け仮説とその問題

Siegel (1974)、Allen (1978) は語形成に課される一般条件として、(1a, b)、(1c, d) の順序付け仮説をそれぞれ提案する。

(1) a. In English, Class I affixation precedes Class II affixation.

b. The cyclic stress assignment rules follow Class I affixation and precede Class II affixation.

(Siegel 1974 : 152)

c. Level I or affix-boundary affixation rules are ordered before Level II or word-boundary affixation rules.

d. Both Level I and Level II affixation rules are ordered before Level III morphological processes, the most important of which are compounding rules.

(Allen 1978 : 215)

形態論の中では非常に興味あるこの仮説は、Allenがクラスをレベルと呼んだり、レベルⅢに複合語形成や *non-* 接辞を置いて分析する点を除き、本筋においては次のようにまとめることができる。

(2) クラスⅠ接辞はクラスⅡ接辞より先に接辞付加が行われる。

従って、クラスⅡ接辞がクラスⅠ接辞より先に付加される語は(2)の仮説により排除される（以降、イタリックの下の数字はクラスを表す。)。

(3) *Mende*$_{2}$*lismian*$_{1}$,　　*Mongo*$_{2}$*lismian*$_{1}$

(Kiparsky 1983 : 4)

一方、クラスⅠ接辞にクラスⅡ接辞を付加する場合や、クラスⅠ・クラスⅡの両接辞に同じクラスの接辞を付加する場合は許される。

(4) Mendel*ianism*$_{1}$$_{2}$,　　Mongol*ianism*$_{1}$$_{2}$

mongol*ianize*$_{1}$$_{1}$,　　dessen*terism*$_{2}$$_{2}$

(Ibid.: 4)

(2)の順序付け仮説は、(1b) のように循環強勢付与規則 (cyclic stress assignment rules) をクラスⅠ接辞付加とクラスⅡ接辞付加の間で適用させるように順序づけることによって、クラスⅠは強勢移動 (stress shift) を引き起こす接辞、クラスⅡは強勢移動を引き起こさない接辞として捉えられる。このように(2)の順序付け仮説は音韻的妥当性を踏まえた仮説であるが、以下のような問題が指摘される。

1.1. 定義上の問題

上で, 接辞のクラス分類の基準は強勢移動を引き起こすか (stress-determining) 引き起こさないか (stress-neutral) によると述べたが、同様に、クラスⅠとクラスⅡ接辞がどのような基体 (base)[3] の形態に付加できるかによって、その分類がなされる。

(5) a. Class I affixes (prefixes and suffixes)

1. are stress-determining.
2. can attach to stems.

b. Class II affixes (prefixes and suffixes)

1. are stress-neutral.
2. attach only to words.

(Allen 1978 : 6)

ここで、(5a) で言っている "stems" が拘束形態素 (bound morpheme)[4] の意味であるなら、クラスⅠの接辞は単独の語 (single word)[5] には付加しないはずである。しかし、(6)のような反例が見られる。

(6) *in*active, inser*tion*, music*al*, sincer*ity*.
　　1　　1　　1　　1

(大石 1988 : 48)

また、(5b) からクラスⅡの接辞は語にのみ付加することがわかるが、例外的

3　接辞付加の作用を受ける前の構造。
4　単独では語の資格をもたないで、ある別の要素と組み合されて語の形式をもつもの。
5　拘束形態素に対して自由形態素 (free morpheme) とも呼ばれる。

に拘束形態素に付加するものも含まれる。

(7)　wilder-*ness*, grue-*some*, ful-*some*,
　　2　　2　　2

hap-*less*, reck-*less*, happ-*y*.
　　2　　2　　2

(Strauss 1982 : 45)

次に、強勢移動に関してクラス分類に問題がないか見てみると、やはり予測に反してクラスⅠ接辞の中に強勢移動を引き起こさないものや、クラスⅡ接辞の中に強勢移動を引き起こすものが出てくる。

(8)　a.　expérienced→*in*expérienced
　　1

effícient→*in*effícient
　　1

fórmal→*in*fórmal
　　1

ádequate→*in*ádequate
　　1

(高橋 1987 : 473)

b.　bíograph→biógraph*er*
　　2

phótograph→photógraph*er*
　　2

1.2.　順序付けパラドックスの問題

(2)の順序付け仮説は、(3)で見たようにクラスⅡ接辞がクラスⅠ接辞より先に付加する派生語を排除するが、従来からこの順序付けには(9)のようなパラドックスが生じ、これをどのように解決すべきかという議論がなされてきた。[6]

6　Aronoff (1976)、Allen (1978)、Selkirk (1982)、Strauss (1982)、Kiparsky (1983)、Pesetsky (1985)、Sproat (1985)。特に、Sproat (1985 : 15-65) はこの辺の事情に関して詳しく論じている。

(9) a. *un*grammatical*ity*, analyz*ability*
　　2　　1　　2　1

b. govern*mental*, develop*mental*
　　2　1　　2　1

c. standard*ization*, national*istic*
　　2　1　　2 1

(Kiparsky 1983 : 21-22)

ここで、(9)のすべての例について順序付けパラドックスの問題に触れる余裕はないので、議論の的になっている *ungrammaticality* に絞って話を進める。また、*ungrammaticality* のパラドックスの解決法には Pesetsky (1985) や Sproat (1985) 等の分析があるが、ここではAllen (1978)、Kiparsky (1983) が提唱する再分析 (Reanalysis) の問題を指摘するだけにとどめる。

Allen (1978) は *ungrammaticality* のパラドックスを排除するために (10a) から (10b) のように内部構造を再分析する。この際、*un-* 接辞は直接名詞に付加することになり、*un-* の下位範疇化においてふさわしくない[7]構造を提供する。

(10) a. [[un grammatical] ity] →b. [un [grammaticality]]

そこでAllenは、(10)の再分析を取り入れる根拠として、(11)のように *un-* 接辞が直接名詞に付加できる例を挙げる。

(11) [un [involvement]$_N$]$_N$, [un [employment]$_N$]$_N$,
　　[un [fulfillment]$_N$]$_N$, [un [acceptance]$_N$]$_N$.

(Allen 1978 : 34)

しかし、(11)のような例は数が少ないこと、また、Sproat (1984 : 110) が言うように、*ungrammaticality* の意味は "not the state of being grammatical" ではなく、"the state of being not grammatical" を表すことから、(10)の再

7　*un-* 接辞は一般に形容詞の基体に付加するが名詞の基体には付加しない下位範疇化素性をもっている。(*e.g.* **unperson* (*unpersonal*)、**unfaith* (*unfaithful*)、**ungrammar* (*ungrammatical*))

分析は望ましくないように思われる。

Kiparsky（1983）は Allen（1978）の再分析の問題を解決するために、接辞の下位範疇化条件（subcategorization requirements）はすべての段階で満たされるように投射の原理[8]を規定する。この方法によれば、(10)で再分析された［un［grammatical ity]］の内部構造が最初に組み合され、*un-* 接辞の下位範疇化条件を満たすように［[un grammatical］ity］の構造に再分析される。しかしKiparsky（p.25）も認めているように、*un-* 接辞の下位範疇化条件がすべての段階で満たされるためには、*grammaticality* が形成される最初の段階において、例外的に角括弧表示削除（Bracketing Erasure）[9] が適用されてはならないと考える必要性が出てくる。しかし、それが適用されないとするなら再分析の必要性は何故、出てくるのであろうか。[10]

さらに、Kiparsky（1983：26）は再分析よりも先に投射の原理が満たされる必要性を挙げ、次の派生語の不適格性を説明しようとする。

(13)　*irresourceful, *insuccessful

例えば、*insuccessful* の派生は、*in-* 接辞が下位範疇化素性として形容詞に付加しなければならないから、*insuccess* のような派生語は投射の原理によりもとから排除され、従って、*insuccess* から *insuccessful* を派生することはできなくなる。順序付け仮説に従うなら、［*in*success］から［[*in*success］*ful*］の派生を行うが、再分析される前に投射の原理[1]に従う必要性を規定しておく[1]と、この順序付け仮説を前提にしなくてもよいことになる、[2]というのが Kiparskyの主張である。

8　Kiparsky（1983）は投射の原理を語彙レベル（*i.e.*　レベルⅠ、レベルⅡ）で発展させている点に注意（cf. Chomsky（1981））。

9　もとは音韻論で使われた用語で、Mohanan（1982）の不透明性の原則（opacity principle）に等しい。内的角括弧表示（Internal Brackets）はすべてのレベルの終わりで義務的に削除されるという規約。

10　Fabb（1988：533）は角括弧表示削除の問題を接辞の選択制限とのからみで挙げ、すべての派生接辞化の過程において角括弧表示は見えて（visible）いなければならないと主張する。

Kiparsky の分析は Allen と異なり、接辞の範疇選択（c-selection）を行いながら再分析を進められる長所をもつが、*ungrammaticality* と *insuccessful* の派生に関しては、いずれも接辞の下位範疇化条件を前提にしながらも、その派生方法は少し違っているように思われる。というのは、*ungrammaticality* の派生は順序付け仮説を前提に再分析が進められるが、*insuccessful* の場合はそれを前提にしないで、投射の原理を満たすかどうかを最初に問題にしているからである。従って、この点、もし *ungrammaticality* の派生においても、順序付け仮説を前提にしないで［un［grammatical ity]］から［[un grammatical] ity］に再分析されると仮定するなら、最初の段階で投射の原理に違反する構造となり、*ungrammaticality* を正しく派生させることはできないはずである。Kiparsky が接辞の下位範疇化条件を投射の原理に結びつけて考えるのは、統語論における平行性を捉える上において妥当な方向と思われるが、順序付けパラドックスを生じさせる語構造の中において、順序付け仮説と接辞の下位範疇化条件を同時に満たすことには無理があるように思われる。解決法としては接辞の下位範疇化条件を投射の原理とするのではなく、Pesetsky（1985）や Sproat（1985）が提案するように範疇選択を反映できるLF構造や統語構造の表示レベルを順序付けのレベルとは別に設けることが必要であろう。また、Kiparskyの主張を生かして接辞の下位範疇化条件を投射の原理に従わせる方法も考えられるが、この場合は、順序付け仮説を前提にしない、語の内部構造に課される条件（本稿の第二節で提案する名詞範疇条件）、によって順序付けパラドックスの問題が処理されるであろう。

1.3. 過剰生成の問題

順序付けパラドックスの問題はこれまで指摘され、様々な解決法が試みられているが、[11] 順序付け仮説のもう一つの問題、すなわち、順序付けに従いながらも派生が阻止される、過剰生成の問題はあまり検討されていなかったように思われる。この問題は、順序付け仮説が提案される前から Chapin（1970）で

11　注の(6)参照。

指摘されている。

(14) *weak*ness*ful*, *judg*ment*ful*
　　2　2　　2　2

*wis*dom*ful*, *move*ment*ful*
　　2　2　　2　2

*pain*ful*ness*less*, *consci*ous*ness*less*
　　2　2　2　　1　2　2

*involve*ment*less*, *agree*ment*less*
　　2　2　　2　2

(Chapin 1970 : 54, 56)

また、Fabb（1984）はこの問題に気づき、さらに次のような派生語を挙げる。[12]

(15) *propo*sal*ed*, *pay*ment*ed*, *puzz*ler*ful*,
　　2　2　　2　2　　2　2

*darwin*ism*ed*, *gambl*ers*ome*, *cleav*age*ed
　　2　2　　2　2　　2　2

(Fabb 1984 : 246-247)

さらに、Fabb（1988）では43種類の接辞を調査し、その可能な組み合せ1849通りのうち、接辞の品詞に関する選択制限（part-of-speech selectional restrictions）[13] と、*-ful, -al, -en* の各接辞に課される個別条件[14] を用いて減じてもまだ614通りの組み合せが可能で、そのうち順序付け仮説は155通りの組み合せしか排除できないという報告をしている。この報告によると、実際には50通りぐらいの組み合せが許されるだけなので、さらに400通りほどの組み合せを排

12　Fabb（1984）は接辞の不都合な組み合せとして4通りの制約（1. *LATINATE AFFIX inside NATIVE AFFIX, 2. *NATIVE AFFIX inside NATIVE AFFIX, 3. *NATIVE AFFIX inside LATINATE AFFIX, 4. *NEUTRAL AFFIX inside NATIVE AFFIX）を挙げて(15)の逸脱性を説明する。この制約の問題点に関しては高橋（1988a）を参照。

13　接辞の下位範疇化素性のこと。

14　*-ful* と動詞由来名詞の *-al* 接辞は“final stress”をもつ基体に付加し、*-en* 接辞は単音節の形容詞に付加する音韻条件をもつ。

除する何らかの手だてが必要になる。

Fabb (1988) はこの問題に対処するために接辞の選択制限を、ｉ) [word-suffix-__] のようにすでに接辞付加を受けた派生語には付加しないもの (*i.e. -age, -an, -ed* (名詞由来), *-ful, -ify* など)、ii) ある特定の接辞を継承するもの (*i.e. -ary, -er* (名詞由来), *-ic* など)、iii) どの接辞に対しても自由に付加するもの (*i.e. -able, -er* (動詞由来), *-ness*)、iv) [+latinate] の素性をもつ接辞を継承するもの (*i.e. -ion, -ity, -ism* (形容詞由来) *-sit, -ize* など) と4種類に分けて接辞の組み合せを説明していく。Fabb (1988 : 538) は4種類の選択制限のうち、ｉ) が最も広範囲に不都合な組み合せを説明できると言っているが、確かに、Fabb の分析は、(14)、(15)の順序付け仮説では予測できない組み合せをｉ) の選択制限[15] によって排除できるので、Siegel (1974)、Allen (1978) の分析よりも記述的妥当性は高いように思われる。しかし、ｉ) の選択制限は何故、その当該の接辞に必要なのか、そして4種類の選択制限をどのように辞書 (Lexicon) の中で位置づけるのか、またそれらを接辞の下位範疇化条件とどのように関連させるのか、といった問題が生じてくる。

2. 名詞範疇条件

前節では、順序付け仮説には 1) 定義上の問題、2) 順序付けパラドックスの問題、3) 過剰生成の問題が生じることを見た。本節では名詞範疇条件を提案し、これらの問題を解決してみよう。

Siegel (1974)、Allen (1978)、その他による順序付け仮説を前提にする立場の人達は、辞書の中であらかじめ接辞にクラスを指定しておき、不都合な接辞の組み合せをクラス間のギャップとして捉える。この捉え方は、接辞のクラス指定に音韻的考慮がなされるものの、語の内部構造とクラスとの関係に対しては余り理論的考慮がなされていないように思われる。その結果が、定義上の

15　Fabb (1988 : 532) はｉ) の選択制限をもつ接辞の中に *-less*、*-some* を挙げていないので、ここではそれらもｉ) のタイプの接辞として考慮に入れて考えている点に注意。

問題に表れたように、接辞が“stem”に付加するのか“word”に付加するのかという困難を生じさせた。しかし、その一方で、クラスを前提にしながら語の内部構造に注意を払いすぎると、Selkirk（1982）のように、*-ment, -ize* に2種類のクラスを設けなければならなくなる。[16] そこで、クラスを前提にしないで語の内部構造だけに目を向けていくことにする。当然、接辞にクラスを指定しなくても、その接辞が“stem”に付加するのか“word”に付加するのかが問題になる。本稿では、Aronoff（1976）の、語に基づいた形態論（word-based morphology）の立場を取る。従って、定義上の問題は生じてこない。

語の内部構造に目を向けると、非常に興味深いことがわかる。例えば、Williams（1981）は接辞も単独の語と同様に範疇を決定でき、多くの場合が語の内部構造の右側に主要部が表れる[17]ことを提案する。本稿においてもこの右側主要部の原則（Righthand Head Rule）を採用し、Lieber（1980）に従い内部構造の範疇素性が浸透の規約（Percolation Conventions）[18] により与えられるものと仮定する。また、語の内部構造の形成はPesetsky（1985）が考察するように辞書の中であらかじめ指定される下位範疇化素性によって与えられるものと仮定する。例えば、*consciousness, puzzler, darwinism* の各派生に対し辞

16　Selkirk は順序付けパラドックス（*e.g. governmental, standardization*）を避ける方法として *-ment* や *-ize* の接辞をクラスⅡからクラスⅠに再分析し、結果的にそれらに2種類のクラスを設けるが、接辞の二重性に関する問題が新たに生じてくる（高橋（1987）参照）。

17　例外的に語の内部構造の左側に主要部が表れる接辞として、*en-*、*a-*、*be-*、*de-*、*out-* の接頭辞がある。

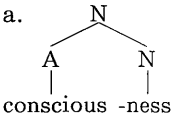
18　規約Ⅰ：語幹の範疇素性を含むすべての素性は、その形態素を支配する最初の枝分かれしていない節点に浸透する。

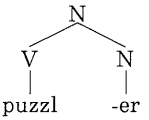
規約Ⅱ：接辞の範疇素性を含むすべての素性は、その形態素を支配する最初の枝分かれ節点に浸透する。

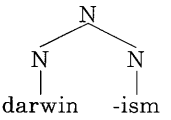
規約Ⅲ：枝分かれ節点が規約Ⅱにより素性を得るということができないなら、すぐ下の標示付き節点からの素性が、自動的に標示の付いていない枝分かれ節点に浸透する。

規約Ⅳ：二つの語幹が姉妹である（つまり、複合語である）なら、右側の語幹の素性が二つの語幹を支配する枝分かれ節点に浸透する。

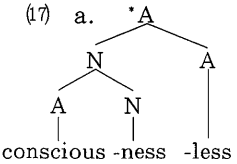
書は、*-ness* に［＋A__］を、*-er* に［＋V__］を、*-ism* に［＋N__］を指定するので内部構造の形成は次のようになる。

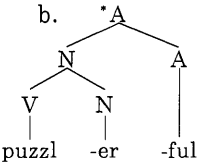
(16) a.


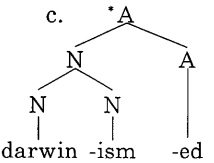
b.


c.


ところが、これらの派生は、(14)、(15)で見たように、(17)の内部構造になると容認されなくなる。

(17) a.


b.


c.


この段階でも *-less, -ful, -ed* の各接辞は下位範疇化素性の［＋N__］を満たしている。従って、下位範疇化とは別の手段で（17a, b, c）の逸脱性を説明しなくてはならない。そこで、（17a, b, c）を排除する方法として次の(18)の条件を仮定することにする。[19]

(18)　最終節点（N）[20] にある名詞範疇は動詞（V）・形容詞（A）・名詞（N）のいずれかの範疇により、二重に C- 統御されてはならない。

この条件を名詞範疇条件（Noun Category Condition）と呼ぶが、以下ではNCCと略し、（17a, b, c）の逸脱性が NCC によりどのように説明されるか見ていこう。

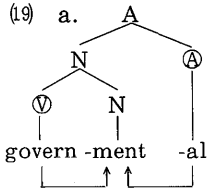
例えば、（17a）の *consciousnessless* の派生は最終節点にある *-ness* の名詞範疇が *conscious* と *-less* の形容詞範疇により二重に C- 統御されるため、(18)の NCC によって排除される。同様に、（17b, c）の *puzzlerful* と *darwin-*

19　(18)の条件は、高橋（1988a）で示唆したものを明示的に定義づけたものである。
20　終端前記号別（preterminal string）にある語彙範疇Nを指す。

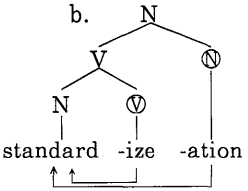
ismed の派生も最終節点の名詞範疇（*-er, -ism*）が動詞（*puzzl*）、形容詞（*-ful, -ed*）、名詞（*darwin*）のいずれかの範疇により二重に C- 統御される結果、NCC により排除される。このようにして、⒁、⒂で挙げた順序付け仮説では説明できない過剰生成の問題が残りの諸例についても NCC を介して説明可能となる。

次に、順序付けパラドックスの問題がどのように NCC により説明できるのか見ていこう。最初に、（9b, c）で挙げた *governmental, standardization, nationalistic* の派生を見てみる。

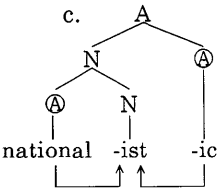
⒆ a.



b.



c.



⒆の内部構造はこのままではいずれもマルで囲んだ範疇が矢印の先の名詞範疇を二重に C- 統御し NCC により排除される構造となる。そこで、構造的には⒄と同じだが⒆の場合、最終的に派生は何故許されるのか考えてみると、⒆の場合は *-al, -ation, -ic* の接辞がクラス I であることから明らかなように、⒄の *-less, -ful, -ed* の接辞と異なり、強勢移動を引き起こすことがわかる。すなわち、*góvernment* から *governméntal* に、*stándardize* から *standardizátion* に、*nátionalist* から *nationalístic* に強勢移動を行う。そこで、強勢移動は語の内部構造を（19a, b, c）から（20a, b, c）のように変換し、最終的には⒆の各語は非派生語と同じ資格をもつものと仮定してみよう。[21]

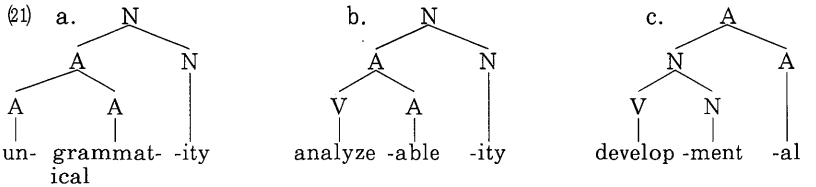
21　同じような考え方が大石（1984）にみられる。大石は順序付けパラドックスの解決法として Selkirk（1982）の再分析を利用して説明するが、再分析が行われる語は頻度等の要因により、合成的な派生語から非派生語に近い資格を有する語に変化すると仮定している。

(20) a. A — governmental　　b. N — standardization　　c. A — nationalistic

その結果、NCC は(20)の構造に抵触しなくなり、正しく *governmental, standardization, nationalistic* が派生される。また、(20)の各語は非派生語と同じ資格をもつので、さらに *governmentally, standardizational, nationalistically* の派生が可能となることも予測される。

次に、(9a) の *ungrammaticality, analyzability* と (9b) の *developmental* の派生を考えてみる。

(21)

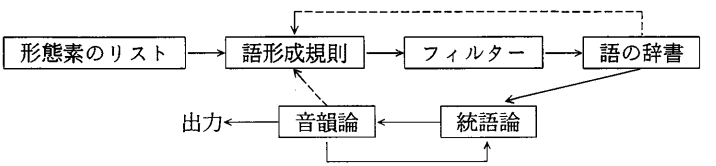


このままの構造でも (21c) を除いてNCCに抵触しない。しかし、いずれの場合も *-ity* と *-al* の接辞付加の段階で強勢移動が生じる。従って、最終的には (22a, b, c) のように内部構造が変換され、NCCを満たすことになる。

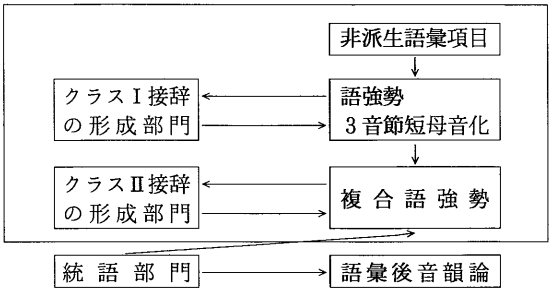
(22) a. N — ungrammaticality　　b. N — analyzability　　c. A — developmental

さて、それでは NCC は何を規定し、語彙部門の中でどのように位置づけられるのか次に考えてみることにする。従来、辞書の枠組みとして Halle (1973 : 8) は(23) を Kiparsky (1983 : 4) は(24)を仮定している。

(23)



(24)　lexicon



(24)のような語彙音韻論（Lexical Phonology）の立場は、語形成部門における音韻規則を接辞のクラスに連動して適用させることを提案するが、我々の分析では、接辞のクラスを前提にしていないので(24)の枠組みでは捉えることができない。そこで、(23)の枠組みを我々の分析に採用してみることにする。

Halle（1973：6）は(23)におけるフィルターを語形成規則によって派生された潜在的な語（potential words）を現実の語（actual words）に絞る装置として仮定している。具体的には、意味的、音韻的、形態的に特異な（idiosyncratic）語彙の情報[22]をフィルターで指定するが、我々の分析では、(18)の NCC や形容詞範疇条件（Adjective Category Condition）[23] がここで働くものと仮定する。語形成規則は下位範疇化素性により投射の原理を満たしながら語の内部構造を決定するものと仮定する。また、Halle（1973：10）が示唆するように語形成規則の中には選択制限に関する情報が含まれていると仮定する。[24] Halle

22　例えば、*obesity* という語は3音節短母音化規則（Trisyllabic Shortening Rule）を受けない音韻的特異性をもつので、その語に［-Trisyllabic Shortening Rule］が指定される。このように、Halle が仮定するフィルターの役割は例外的なものを処理する場所である。

23　高橋（1988b）で提案した形容詞範疇条件：「形容詞範疇は動詞・形容詞・副詞のいずれかの範疇により二重に C- 統御されてはならない」を指す。詳細については、Takahashi（to appear）参照。

24　具体的にはよくわからないが、Fabb（1988）で言っているような選択制限をここに指定できるかもしれない。

は語形成規則には(23)の図が示すように辞書、統語論、音韻論の情報が必要であると仮定するが、本稿ではさらに語用論、意味論、形態論の情報[25]も語の内部構造を決定する際に必要であると仮定する。このように仮定すると、先に述べた強勢付与規則は音韻論の情報として語の内部構造を変換する働きをもつが、(19)や(21)の強勢付与規則を与える前の構造をD構造、(20)や(22)の強勢付与規則を与えたあとの構造をS構造と呼ぶと、その語の内部構造の変換はNCCを満たすように適用されることがわかる。次節では、NCCの妥当性としてゼロ派生・切り取り規則との関連性を見るが、そこでもNCCは本節で述べたように語形成規則のフィルターとして働くことが明らかとなる。

3. NCCの妥当性

3.1. ゼロ派生

ゼロ派生は（25a, b）に見られるように接辞を加えないで範疇を変化させる現象のことを言う。[26]

(25) a. figure_N　　figure_V

gesture_N　　gesture_V

condition_N　　condition_V

fracture_N　　fracture_V

25　例えば、語用論の情報は複合語の形成に必要であるかもしれない。大石（1988：204）は *transformational grammarian* の複合語はX（*transformational grammar*）とY（*grammarian*）の混成により派生されるが、*short grammarian* はX（*short grammar*）とY（*grammarian*）の混成により派生されないと考える。その理由として、大石は混成（の過程）は語用論的基準により決まってくると考える。すなわち、"transformational grammar"（「変形文法」）は語用論的に定着しているので "transformational grammarian" が可能だが、"short grammar" という文法は存在しない、従って定着もしていないので "short grammarian" が「背の低い文法家」という句の意味以外では使われないと考える。大石の混成の分析は興味あるが、**comfortability* や **peaceability* のいわゆる N-ability の逸脱性を混成では捉えられない問題が残る。意味論、形態論の情報については第三節で述べる。

26　本稿では Allen が主張するようにゼロ派生は ϕ の派生接辞化を行うものと仮定する。

b. respect_V　　respect_N

support_V　　support_N

exhaust_V　　exhaust_N

affect_V　　affect_N

(Allen 1978 : 272)

(25a, b) においてゼロ派生の基本になるのは名詞・動詞のいずれの形であるかが従来から議論されてきた。[27] Allen (1978) は (25a, b) に名詞由来形容詞の *-al* と動詞由来形容詞の *-ive* を付加することによって (26a, b) のように文法性に違いが出てくることに気づき、(25a) では名詞を、(25b) では動詞を、ゼロ派生が行われる前の基本形と考える。

(26) a. figural_A　　$^*\text{figurive}_A$

gestural_A　　$^*\text{gesturive}_A$

conditional_A　　$^*\text{conditionive}_A$

fractural_A　　$^*\text{fracturive}_A$

b. respective_A　　$^*\text{respectal}_A$

supportive_A　　$^*\text{supportal}_A$

exhaustive_A　　$^*\text{exhaustal}_A$

affective_A　　$^*\text{affectal}_A$

(Ibid.: 274, 275)

Allen は音韻的根拠[28] に基づいてゼロ派生はレベルⅢで適用されると仮定している。従って、(25a) で $[X]_N$ から $[\,[X]_N\ \phi]_V$ にゼロ派生したあとにレベル (＝クラス) Ⅰの *-ive* を付加することは順序付け違反になり、(26a) のように $[[[X]_N\ \phi]_V\text{-ive}]_A$ の構造が排除される。同様に、(25b) で $[X]_V$ から $[[X]_V\ \phi]_N$ にゼロ派生したあとにレベルⅠの *-al* を付加できなくなり、(26b)

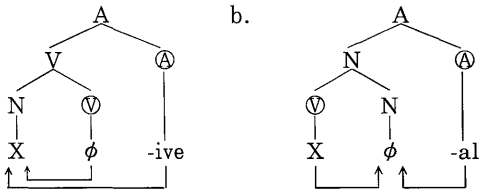
27　Marchand (1960)、Allen (1978)、Kiparsky (1982)、Kiparsky (1983)。

28　Allen (1978 : 281) はゼロ派生 (*e.g. condúct→cónduct*) の際に強勢が複合語と同じように左側に移動することを根拠にしてゼロ派生を複合語と同じレベルⅢで適用させる。

のように $[[[X]_V\ \phi]_N\text{-al}]_A$ の構造が排除される。

我々の分析も NCC を使って（26a, b）の右側の派生を排除することができる。（26a）の *-ive* 付加後の構造は（27a）に、（26b）の *-al* 付加後の構造は（27b）のようになる。

(27) a.　　b.



（27a, b）ともマルで囲んだ動詞と形容詞の範疇が矢印の先の名詞範疇を二重に C- 統御する。その結果、NCC に違反し、（26a, b）の右側の派生が排除される。

（26a, b）の事実を説明する上では、順序付け仮説も NCC も同じ範囲をカバーできるので記述的妥当性は同じである。しかし、Marchand（1960）が挙げている接辞の付いた語からのゼロ派生は許されない事実[29]（*i.e.*（28a, b））を順序付け仮説は説明できない。なぜなら、（28a, b）において *-ment* と *-dom* はレベルⅡの接辞なので、その後レベルⅢでゼロ派生が生じても順序付け仮説の違反にはならないからである。[30]

(28) a.　$*[[[\text{improve}]_V\text{-ment}]_N\phi]_V$

　　b.　$*[[[\text{free}]_A\text{-dom}]_N\phi]_A$

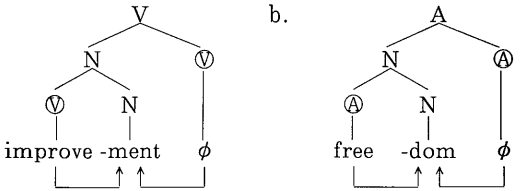
一方、NCC は（28a, b）の派生を（29a, b）のように捉え、正しく Marchand

29　Marchand（1960 : 302）は（28a）のように動詞由来名詞から動詞を派生させたり、（28b）のように形容詞由来名詞から形容詞を派生させるのが許されないのは *improve* や *free* が前もって存在するので理に合わないからだと考える。

30　Kiparsky（1982 : 13）はゼロ派生をレベルⅡに位置づけているが（28a, b）の逸脱性を説明するのに、「同じレベル内において接尾辞の付いた形にゼロ接尾辞は付加できない」というアドホックな説明をしている。

が挙げる事実を説明できる。

(29) a.　b.



島村（1987：162）は（28a）と同じ構造をもつと考えられるにもかかわらず順序付け仮説に抵触しないで派生される（30）の語を挙げる。

(30) a.　allowance（人に飲食物などを一定の量に制限して与える）

b.　beggar（～を貧乏にする）

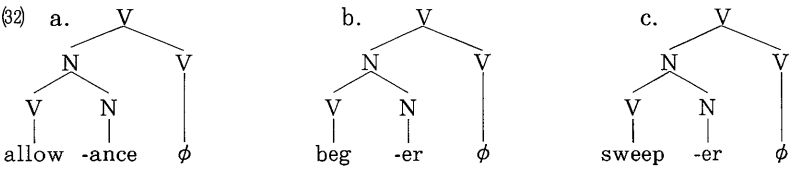
c.　sweeper（the floor）（～を掃除器で掃除する）

島村の説明によると、(30)の各語は本来動詞がもっている意味（*i.e.*「与える」、「求める」、「掃除する」）とは異なる語彙化された意味をもつので、それらを（28a）のような順序付けによる構造とみなさないで、むしろレベルが下降して(31)のような非派生語の構造になっていると仮定する[31]。

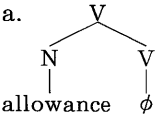
(31)　[X-Class II Suffix]$_V$

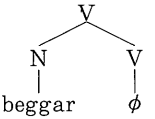
この考え方は、我々の分析に都合がよい。というのは、我々の分析では(30)の各語は D 構造で(32)のような内部構造をもち、その後、NCC を満たすように語彙化が行われ、(33)の S 構造が得られる。

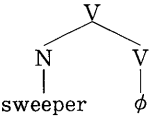
(32) a.　b.　c.



31　島村の説明は意味的根拠を基に語彙化を捉える点で納得が行くが、何故ゼロ派生の場合は、*-abl* 接辞のようにひとつ下のレベルに下降しないで一挙に非派生語の資格になるのか明らかではない。*-abl* もゼロ派生の場合も意味の特殊化という点では同じ語彙化の過程と考えられる。

(33) a.


b.


c.


このように語彙化を(32)から(33)への内部構造の変換と捉えると、(30)の各語はあくまでも動詞由来名詞からゼロ派生によって生成させることができる。また、(33)の内部構造は（28a）と異なり、(33)のゼロ派生が何故許されるかが NCC により予測可能となる。

3.2. 切り取り規則

Chapin（1970）は *-ful* 接辞が例外的に何故、*mourn, forget, resent* の三動詞だけに付加できるのかを問題として取り挙げている。この問題に先立って、Chapin は *-ful* 接辞の下位範疇化を求め、(34)のイタリックのように動詞と名詞が同じ形をした基体のうち、どちらの範疇に *-ful* 接辞が付加するのかをテストする。

(34) *play*ful, *hope*ful, *worship*ful, *thank*ful など

(Chapin 1970 : 53)

Chapin は名詞に対する動詞形が（35a）のように違う場合、*-ful* 接辞が名詞には付加できても動詞には付加できないこと、また、もともと動詞形をもたない（35b）の名詞に *-ful* 接辞が付加できるという事実から、*-ful* 接辞は基体として名詞範疇を取らなければならないと結論づける。

(35) a. *thought*ful（**think*ful）

b. *peace*ful, *glee*ful

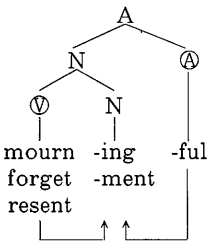
(Ibid.: 53)

ところが、最初に述べたように *mourn, forget, resent* の動詞が *-ful* 接辞の基体となり *mournful, forgetful, resentful* を派生するので、この結論とは矛盾することになる。そこで、Chapin はこれらの動詞が基底では(36)のような名詞形をしていて、*-ful* 接辞付加の際に *-ing* と *-ment* の接辞が切り取られると仮定する。

(36)　mourning, forgetting, resentment

Chapin は、(36)の名詞形から *-ful* 接辞付加の際に何故 *-ing* や *-ment* が切り取られるのか理由はわからないと言っているが、NCCを考慮に入れるとその理由が明らかとなる。すなわち、*mourningful, forgettingful, resentmentful* の内部構造を(37)としてみると、マルで囲んだ動詞と形容詞の範疇が矢印の先の名詞範疇を二重にC-統御することがわかる。

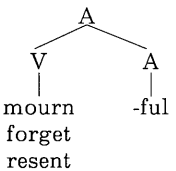
(37)　a.



従って、このままの構造では NCC に抵触するので、NCC を満たすように *-ing* と *-ment* が切り取られる。[32] そして、最終的には *-ful* が動詞に直接付加する(38)の構造に変換する。

このように NCC を仮定すると、*mourn, forget, resent* の例外性を排除でき、

(38)　a.



32　Aronoff (1976) における切り取り規則はクラスⅠ接辞に適用され語彙化の過程を説明する (*e.g.* tolera*t*able (我慢できる) →tolerable (まあまあの))。しかし、Aronoff (1976 : 93) で仮定するようにクラスⅡに属する副詞の *-ly* の切り取り (*e.g.* *strong*l*ier→stronger) もあり、(37)における *-ing*、*-ment* の切り取りはこれに平行するものと思われる。要するに、切り取り規則には主としてクラスⅠ接辞に適用し語彙化を説明するものと、語の適格性を決定するためにクラスⅡ接辞に適用する二つのタイプがあるものと思われる。なお、語彙化と切り取り規則の関連性については Takahashi (to appear) を参照。

-ful 接辞の下位範疇化素性を［+N or V__］から［+N__］に簡潔にすることが可能で、辞書の情報としても NCC は記述的に妥当な方向と考えられる。

4. むすび

本稿では Siegel (1974)、Allen (1978) による順序付け仮説の問題（第一節）を解決するために NCC を提案し、具体的にその解決法を試みた（第二節）。また、NCC の妥当性としてゼロ派生と切り取り規則との関連性を見た（第三節）。NCCを仮定することにより何が言えるかまとめてみると、語形成規則により形成された派生語の内部構造（D 構造）は音韻情報（強勢移動）、意味情報（語彙化）形態情報（切り取り規則）をもとに、投射の原理を満たしながら S 構造に変換される（(19)と(20)、(21)と(22)、(32)と(33)、(37)と(38)）。その一方で、語形成規則は D 構造から S 構造に至る間、内部構造に変化なく過剰生成させる（(17)、(27a, b)、(29a, b)）。いずれの派生過程を辿っても NCC は可能な語から現実の語を選択するフィルターの役割を果たしている。NCCの定義をよく見ると，統語論で仮定されている θ 規準（θ-criterion）[33] に類似していることに気づく。文レベルにおいて θ 役割が主題関係を規定するように語彙レベルにおいても語の派生関係を規定する θ 役割があると仮定するのは、投射の原理からの当然の帰結であろう。しかし、現在の段階では語の内部にどのような主題関係が見られるのか明らかではない。[34] また、形態論の現状は語の内部間の θ 役割を見るよりも複合動詞や接辞がどのような項構造（argument structure）を取るのかに関心があるようである。[35] 従って、本稿で提案する NCC は語の内部構造を規定するユニークなものであるが、順序付け仮説より語の一般性を捉えることができ、しかも統語論で言われる一般原理との結びつきを強く示唆しているので今後、NCC の可能性を追求することは非常に興味深いものと思われる。

33　1つの項は θ 役割を必ず1つだけもち、また、1つの θ 役割は必ず1つだけの項に付与される。(18)で仮定した名詞範疇が θ 役割をもつ項と仮定すると、動詞・形容詞・名詞の語彙範疇により二重にその項に θ 役割を与えてはいけないとNCCを解釈できる。

34.　Aronoff (1976 : 47-50) に *-ee* や *-er* の接辞の主題関係を示唆するところが見られる。

35　Randall (1984)、Roeper (1987)、島村 (1990)。

References

Allen, M. 1978. *Morphological Investigations*. Ph.D.dissertation, University of Connecticut.

Aronoff, M. 1976. *Word Formation in Generative Grammar*. MIT Press.

Chapin, P. 1970. "On Affixation in English." In M. Bierwisch and K.E. Heidolph (eds.) *Progress in Linguistics*. The Hague: Mouton, 51-63.

Chomsky, N. 1981. *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.

Fabb, N. 1984. *Syntactic Affixation*. Ph.D.dissertation, MIT.

Fabb, N. 1988. "English Suffixation Is Constrained Only by Selectional Restrictions." In *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 527-539.

Halle, M. 1973. "Prolegomena to a Theory of Word Formation." In *Linguistic Inquiry* 4, 3-16.

Kiparsky, P. 1982. "Lexical Morphology and Phonology." In I.S.Yang (ed.) *Linguistics in the Morning Calm*. Seoul: Hanshin 3-91.

Kiparsky, P. 1983. "Word-Formation and the Lixicon." In F.Ingemann (ed.) *Proceedings of the 1982 Mid-America Linguistics Conference*. Lawrence, Kansas: University of Kansas, 3-29.

Lehnert, M. 1971. *Reverse Dictionary of Present-Day English*. Leipzig: VEB Verlag Enzyklopädie.

Leiber, R. 1980. *On the Organization of the Lexicon*. Ph.D. dissertation, MIT.

Marchand, H. 1960. *The Categories and Types of Present-Day English Word-Formation: A Synchronic-Diachronic Approach*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

Mohanan, K.P. 1982. *Lexical Phonology*. Ph.D.dissertation, MIT.

大石強. 1984.「語構造の再分析について」『文経論叢』第19巻, 第3号（弘前大学人文学部), 85-97.

大石強. 1988.『形態論』(現代の英語学シリーズ) 第4巻. 東京：開拓社.

Pesetsky, D. 1985. "Morphology and Logical Form." In *Linguistic Inquiry* 16, 193-246.

Randall, J.H. 1984. "Morphological Complementation." In *MIT Working Papers in Linguistics* 7, 70-85.

Roeper, T. 1987. "Implicit Arguments and the Head-Complement Relation." In *Linguistic Inquiry* 18, 267-310.

Selkirk, E. 1982. *The Syntax of Words*. MIT Press.

Siegel, D. 1974. *Topics in English Morphology*. Ph.D.dissertation, MIT.

島村礼子. 1987.「『語彙化』について」『津田塾大学紀要』第19号, 155-173.

島村礼子. 1990.『英語の語形成とその生産性』東京：リーベル出版.

Sproat, R. 1984. "On Bracketing Paradoxes." In *MIT Working Papers in Linguistics* 7, 110-130.

Sproat, R. 1985. *On Deriving the Lexicon*. Ph.D. dissertation, MIT.

Strauss, S.L. 1982. *Lexicalist Phonology of English and German*. Dordrecht: Foris.

高橋勝忠. 1987.「否定接辞に関する考察－ *un-* 接辞のクラスについて」『福岡大学人文論叢』第19巻, 第3号, 469-487.

高橋勝忠. 1988a.「英文法指導における『何故』の解明－その3 語形成」『福岡大学総合研究所報』第103号, 33-37.

高橋勝忠. 1988b. "On the Principle of θ-criterion in Word Level." *A Conference Handbook* read at the 6th National Conference of the English Linguistic Society of Japan, held at Aoyama Gakuin University.

Takahashi, K. (to appear). "Adjective Category Condition in Word Formation." In *Proceedings of the 5th Summer Conference 1991 Tokyo Linguistics Forum*.

Williams, E. 1981. "On the Notions 'Lexically Related' and 'Head of a Word'." In *Linguistic Inquiry* 12, 245-274.